

外国人と日本人とが、ともに豊かに生きる地域社会を!

ハロー フレンズ

ファイセック

FICEC

発行

ふじみの国際交流センター
Fujimino International Cultural Exchange Center

2008年 9月号 (隔月刊) 第98号

ふじみの国際交流センター発足10周年イベント 『隣の芝生をのぞいてみよう』を開催

ふじみの国際交流センター (FICEC) が活動を開始してはや10年。センターでは、20近くものプロジェクトや事業が展開されています。そこで、こうしたセンターの活動に参加する会員、利用者、スタッフによる交流会が開催されました。(詳しくは次ページ以降)



プロジェクターを使って、個々のスタッフが説明。



外国籍の子どもたちも日本語でみんなに説明。



60人もの参加者が、熱心に活動内容などに聞き入った。



センターの石井ナナエ理事長が活動の全体像について説明。

センター総会および交流会の開催

ふじみの国際交流センター第10回総会を開催 平成19年度事業報告と、20年度事業計画を承認

交流イベント『隣の芝生をのぞいてみよう』も開催され、FICEC全体の事業内容について意見交換

センター利用者数は年間で延べ2,500人

2008年6月15日(日)、ふじみの国際交流センター(FICEC)の第10回総会が開催された。NPO法人としての定款に基づく年1回の最重要会議。暑い中だったにもかかわらず、約40人の会員が出席して、平成19年度事業報告・収支決算報告や、平成20年度事業計画・収支予算などについて審議が行われた。

総会に提出された「平成19年度事業報告書」によると、平成19年度のFICECの開放日数(会社などの営業日数)は290日。そして1年間でFICECの施設に来訪するなどして利用した人は延べ2,500人以上にのぼっている。

NPO法人としての19年度1年間の活動内容は、次ページの表にまとめたとおりだが、「外国人の人権擁護と自立支援」「国際理解と国際交流の推進」「多言語情報の収集と提供」「日本語学習事業」「子どもの健全育成」など、多岐にわたる内容で多数の事業が行われた。

総会では、こうした事業報告や決算報告、さらに平成20年度の事業計画、予算案について了承されて閉会となった。

センターの延べ利用者数		
開放日数		290日
休止日数		76日
利用者	外国人	1,411人
	日本人	1,156人
	計	2,567人
スタッフ	外国人	118人
	日本人	1,639人
	計	1,757人

会員、利用者、スタッフなどの交流会を開催

総会に引き続いて『隣の芝生をのぞいてみよう』と題して、交流イベントが開催されたのが、例年と違うところ。

FICECは、多数の会員、スタッフがいて、外国籍市民を含めて大勢の利用者がある。しかし、おのおののスタッフ、利用者などは、自分がかかわりのある部分について知識はあっても、FICECが全体としてどのような活動を行っているかについては、意外に知る機会がない。そこで、総会の機会を利用して、FICECの活動全体について、個々の活動スタッフが、その内容などについてみんなに紹介し、意見交換をしようという趣旨で行われたもの。言葉をかえていえば、FICECというボランティア団体が誕生後10年を経過して、それだけの規模にふくれあがり、活動内容も充実してきたということでもあるが、自分がかかわっている以外の事業内容を知ることによって、お互いの理解を深めたり、補完したりすることが可能ではないかという期待をこめて開催されたものだ。この時間帯は、総会を上回る約60人の参加者があった。

ここでは、まずはじめに、理事長の石井ナナエからセンターの歴史とミッションについて話があり、続いて各活動スタッフによる熱の入ったプレゼンテーションが行われた。FICECには、20もの事業があるが、各事業の説明はパワーポイントを映写したもとのわかりやすいものだった。

発表したのは、自立支援プロジェクトとして、生活支援/シェルター、国際子どもクラブ、日本語

教室。コミュニケーションプロジェクトとして、「インフォメーション・ふじみの」、ホームページ、生活ガイド、「ハローフレンズ」。そして多文化共生プロジェクトとして、交流イベント、語学教室（中国語・韓国語）、ふじみの国際わいわいクラブ、子どもと共に育つ親の会、国際理解、インターンシップなどだった。

こうした活動内容の発表後には、スタッフが手作りしたマンゴーケーキや、チーズケーキを食べながら、プロジェクトごとに集まって、活動について詳しく話したり、質問したりと、なごやかなかにも活発に意見交換が行われた。（文：上原美樹、篠島幹昌）

交流イベントでの活動紹介内容
センターの歴史とミッション
【自立支援】プロジェクト
①生活相談、シェルター
②国際子どもクラブ
③日本語教室
【コミュニケーション】プロジェクト
①多言語情報誌『インフォメーションふじみの』
②ホームページ、生活ガイド
③機関誌『ハローフレンズ』
【多文化共生】プロジェクト
①交流イベント
②語学教室（中国語教室、韓国語教室）
③ふじみの国際わいわいクラブ
④子どもと共に育つ親の会
⑤国際理解、インターンシップ、その他

事業名	事業内容	実施日数 回数	実施場所	従事者	受益者	
外国人の人権擁護 と自立支援	生活相談	5日/週	センター	10名	541件	
	シェルター	129日		10名	334人・日	
	DV講習会	2/2,2/9	ふじみ野市	10名	延30名	
国際理解と 国際交流の推進	国際理解講座	外国人講師派遣	13回	小・中学校	延32名	
	社会教育	講師派遣	14回	大学・公民館等	延27名	
	国際交流	イベント	10回	2市1町	延29名	
		HANARO会	-	-	-	
		子どもと共に育つ親の会	13回	2市1町	延30名	延188名
		中国語教室	毎週金曜日	センター		
		韓国語教室	毎週月曜日・水曜日	センター	延58名	延440名
		英語教室	53回	センター	延53名	延277
		ポルトガル語	毎週火曜日	西公民館	~2名/回	
		パソコン技能習得	10回	センター	延10回	延24名
		生活情報誌の発行	12回	センター	15名	6000部
多言語情報の収集と提供	ハローフレンズ	隔月	センター	15名		
	生活ガイドHP維持管理	4回/年	センター	6名		
	翻訳・通訳	121件	センター	延25名		
	日本語学習事業	日本語指導	日本語教室	51回	センター	延148名
親子日本語教室			毎週土曜日	大井中央公民館	5名	4~5名
取り出し授業			-	-	-	
国際子どもクラブ			土曜日、他	センター	10名	3~10名
日本語教材			-	-	-	
子どもの健全育成	国際わいわいクラブ	イベント8回 キャンプ1回	地域公民館他 長野県	延121名	延374名	
緊急時対策事業	2市1町防災訓練	8月1日	ふじみ野市	4名		

外国人と日本人との相互交流を図る「国際理解講座」 小学校などへの教育支援の 活動としても継続

学校や公民館などからの依頼 で講師を派遣

ふじみの国際交流センター（FICEC）では、地域に住む外国籍市民と日本人との橋渡しをするためのさまざまな活動をしているが、「国際理解講座」もその一つ。この活動は、小中学校や地域の自治体、公民館などの依頼を受けて、児童、生徒や地域住民が外国の文化や在日外国人の状況などについての理解を深める手助けをするという教育支援活動だ。センターに協力している外国籍の人たちが、学校や公民館などに講師として出向いて、外国での生活の状況、外国文化の紹介をすることもあるし、センターの日本人スタッフが講師となって外国人の日本での暮らしぶりなどについて話をすることもある。

「2000年ごろに、学習指導要領で『総合的な学習の時間』ができましたが、その前後から、ことに学校から『外国からきた人たちの話を聞きたい』と依頼されるようになりました」と話すのは、FICEC 理事長の石井ナナエさん。



左から長谷川さん、柳さん、石井さん

「総合的な学習の時間」というのは、児童や生徒が自発的に横断的、総合的な課題学習を行う授業として設定されたもの。国際化や情報化といった社会の変化をふまえて、子供たちの自ら学ぶ力の育成を目指したもので、国際理解、情報、環境、福祉といったテーマが例示されている。FICECには、もっとも多いときで年間70回ほどの講師派遣の要請があったが、最近では年間10回程度となっているとのことだ。

FICECで、この活動の窓口になっている長谷川正江さんは、「学校からは、『外国の人と交流しよう』『世界地図を描いてみよう』といった学校側で設定したテーマの中で、直接外国の人たちの話を聞きたいということで、外国籍の人たちとの仲介を依頼されます。そうした依頼がくると、日本語教室などでセンターにかかわりを持つ外国籍の方と打ち合わせをしたうえで、学校に行き話をしてもらいます」と話す。

1年前から、センターからの依頼で学校に行き外国での生活ぶりなどについて話しているという韓国出身の柳ザヒさんは、「小学校なんかで話をするときには、地図を示して『韓国は、日本のすぐそばにある国で、文化的にもすごく共通点が多いんですよ』というような話からはじめます。お盆もあるし、正月もあるし、学校も小学校6年間、中学、高校が各3年間といった身近なところから理解してもらおうようにしています」と話す。食べ物だとか、小中学生の遊びだとかいろんな話をするが、ときには「いま子どもたちの日本語がすごく乱れていて、残念に感じます」といった、日本に対する自分なりの感想を話すこと



松井直子先生



子どもたちが自分のもつ疑問について質問

もあるという。学校での授業で話をするときには、このようにして母国の文化などについて説明をした後、子どもたちの質問を受けるなどして進行していくとのことだ。

外国の人たちの話を直接聞ける貴重な時間

富士見市立勝瀬小学校では、「チャレンジQ」という名称で総合的な学習の時間の年間計画を立てている。「Q」というのは「クエスチョン」の略で、「疑問にチャレンジ」という意味を持っている。子どもたちが自ら課題となる「疑問」を設定して、その問題解決のための学習をするということ。3年生から6年生まで、学年ごとに食、環境、歴史といったテーマで年間100時間以上の学習をするが、4年生のテーマは「人と地域」。その中に「地域に住む外国人の方との触れ合い」という内容が織り込まれている。

7月のある日、同校でその授業が行われた。この日、招かれたのは柳ザヒさん(韓国)、山本ヴァンさん(ベトナム)、三矢百合子さん(ブラジル)、寺村壁如さん(台湾)の4人。いずれもFICECの活動に協力している外国出身の女性たちだ。2時間連続で行われた授業の中で、最初にそれぞれの人から自国について話

をした後、子どもたちからの質問を受けた。その内容はバラエティ豊かで、サッカーや野球などスポーツについての質問をする子もあれば、食事・料理のこと、年中行事のこと、昔話のこと等々。中には、夏休みの過ごし方とか、学校のチャイムの音、給食など、外国の学校生活についての質問も出ていた。

同校で「総合的な学習の時間」の主任をする松井直子先生は、「各自が課題をもって追究するという授業です。今日、外国人の方々から話を聞いて、子どもたちはさまざまな興味や関心を持ったはず。この後は、その興味・関心をもとに課題を立て、図書やインターネット等を利用して調べます。そして、最終的にもう一度外国の方たちに来ていただき、わからないところを質問し、自分たちの答えを出すというプロセスで進めます」と話す。

「日ごろ、外国についてはテレビや写真で見えても、直接触れる機会は意外にないですね。そういう中で、この授業では直接外国の人たちから話を聞けるので、児童にとっては一生の宝になる時間だと思います」と松井先生。

こうしてFICECは、子どもたちを含めて、地域の人たちと外国籍の人たちが交流を深められるような活動を継続している。

(取材・文：内藤忍)

国境なき医師団の一員として見た アフリカの医療現場

世界で一番いのちの短い国 シエラレオネの国境なき医師団

山本敏晴 著

白水社刊

定価1400円 + 税



著者の山本敏晴氏は、「国境なき医師団（以下「MSF」）の一員として、シエラレオネ共和国で半年間活動した。この本は、そのときの活動内容をまとめたものである。

シエラレオネ共和国は、アフリカ大陸の西端、ギニアの隣に位置する。面積7万1740平方km、人口約580万人（2007年、UNFPA）の小国である。平均寿命、乳児死亡率、妊産婦死亡率など各医療統計の数値がきわめて悪く、「まぎれもなく世界最悪の医療事情にある国」といえる。

政府軍、反乱軍のあいだで内戦が続き、病院などの建物も倒壊。患者を治療するためには、医療システムそのものを立て直さなければならなかったという。そのうえ、病院スタッフのなかには、正規の資格を持った医者、看護師が少なく、「なんの資格もない近所の人たち」が多い。そんな中で、著者を含むMSFスタッフは、みずからも下痢などに悩まされながら、治療にあたっていく。長い内戦で、民間の人たちの負傷者も数多く、それに対する治療が必要。蚊が媒介するマラリア、ねずみが媒介するラッサ熱など、感染症も多々。医療スタッフ自身が感染の危険にもさらされるエイズ等々。

さらに、もっとも重要なのは、MSFスタッフが帰国した後の医療体制。そのため、著者らは現地スタッフの「教育」にも熱心に取り組

み、自らが帰国した後も「同じレベルの医療を維持」できるよう努めたとのこと。

本書では、「本当に意味のある国際協力とはなにか」「どのような活動が本当にその国の未来にとって役に立つのか」といったテーマも取り上げている。たとえば、国際協力に参加する心構えとして、「その国の言葉を覚え（少なくとも覚えようと努力し）、その国の文化・風習・社会制度・宗教・政治形体などを把握し、（中略）彼らと同じ視線で考えてみる」べきではないかと指摘。つまり、「貧しい人にお金や薬をばらま」くような「その場しのぎ」の活動では、「将来さらなる大きな問題を招き、未来に起こる事態を悪化させる」という。

だが、著者自身、「国際協力の形として、なにが本当に正しいのか正直言ってわからない」とも告白する。この本のなかで述べた自らの意見にも、「賛否両論があってもいい」と考える。

最後に、約半年間のプロジェクトを終えて帰国した著者は、シエラレオネ共和国と自分との関係が、「終わったわけではない。むしろ、このあとが本当の正念場」と述べている。帰国後は、シエラレオネ共和国の現状を数多くの人々に知ってもらうため、講演、写真展、記事の投稿などを積極的に行っている。

（文：福田雅伸、内藤忍）

タイ料理

ビーフンを使った焼きそば

パッタイ

ビーフンを使った焼きそばは、日本の焼きそばに比べて軽い味わい。

講師：平山ワチャリンさん

(タイ料理店「うさぎ」経営)



料理の作り方 (材料は4人分)

材料

- センレック.....400g
(3ミリ幅のビーフン)
- 豚肉.....200g
- 桜えび.....大さじ4
- ニンニク.....2片
- もやし.....300g
- ニラ.....1束
(100g、長さ4cmにカット)
- 卵.....3個(割りほぐしておく)
- ピーナッツ.....大さじ3
(砕いておく)
- サラダ油.....大さじ7
- カキ油.....大さじ8
- 砂糖
- ナンプラー(タイの醤油)
- 唐辛子

センレックはぬるま湯で10～15分戻す



フライパンにサラダ油をひいてニンニクを少し炒める



豚肉を入れて炒める



豚肉の色が変わってきたら、卵を入れて炒める



センレック、もやし、ニラ、桜えびをフライパンに入れ、調味料としてナンプラー、カキ油、砂糖大さじ2を入れて、よくかき混ぜながら炒める



もやしやニンニク、桜えびなどにも火が通ったら完成。

砕いたピーナッツと唐辛子をかける。好みで、ライムまたはレモンを入れてもよい。



今回の料理を紹介してくれたのは、上福岡でタイ料理店の「うさぎ」を経営するワチャリンさん。安くておいしい料理、そして「タイの歌、日本の歌両方のカラオケもあります」とのこと。

うさぎ

ふじみ野市上福岡1-12-18
(上福岡駅から徒歩5分)

電話：090-8961-0947

営業時間 平日 18:00～24:00

土日 12:00～15:00、18:00～24:00

センターの活動をご支援ください
会員・賛助会員・寄付のご案内

活動を担う会員.....正会員

正会員は、スタッフなどとして活動を担っていただく会員です。この会員は、総会などでの議決権をもちます。

年会費：個人1口3,000円、団体1口10,000円

センターを財政的に支える会員.....賛助会員

賛助会員は、センターを財政的に支えていただく会員です。総会等での議決権はありませんが、センターのイベントなどのご案内や、機関誌をお送りいたします。

年会費：個人1口3,000円、団体1口10,000円

会員、賛助会員にはこの機関紙をお送りします

郵便振替口座：00110-0-369511
 口座名：ふじみの国際交流センター

ご寄付をいただいた方々

ご支援ありがとうございます

2006年4月～(50音順・敬称略)

穴沢エミリン 伊藤智明 伊藤真弓 いも煮会 上島直美
 小澤ヴィクトリア 小原富明 オムテック(株) 葛西敦子
 加藤久美子 金子忠弘 金子康子 上福岡教会 候 国
 際ソロプチミスト 後藤泰弘 駒形一夫 斉藤彩子 菅山
 修二 鈴木譲二 堰代仁子 染谷英子 高橋郁子 高橋
 智子 武田和子 立麻医院 寺村壁如 中嶋恵津子 萩
 原千代子 長谷川美紀子 ハナロウ会 羽石電気 半田
 栄子 東入間防犯協会 深見水季夫 三澤真理 村上
 省三 百瀬 滉 森田信子 (有)矢野住研 矢野やすこ

ご寄付は税金の控除や損金参入の対象となります

ふじみの国際交流センターは、国税庁からの認定を受けた「認定NPO法人」ですので、ご寄付は、法人であれば損金参入が認められ、個人であれば寄付控除の対象となります。

ふじみの国際交流センター (FICEC) のスクール、クラブ

<p>日本語教室 「生活に役立つ日本語の習得」を目標に、日本人が日本語で教える教室。 毎週木曜日 午前10時～12時 受講料：無料</p>	<p>国際こどもクラブ 日本語が不自由な子どもたちに日本語や勉強を教えます。 毎週土曜日 午前10時～12時 受講料：無料</p>	<p>英語教室 隔週水曜日・木曜日 午後7時～ 受講料：月4回4000円 第二、第四火曜日 午後1時～3時 受講料：月2回2000円</p>
<p>中国語教室 学習者の中国語能力により、初級、中級上級に分かれて学習します。 毎週金曜日 午前10時～12時 冷暖房1回200～300円</p>	<p>韓国語教室 韓国語初級講座。韓国人の先生が、やさしく丁寧に教えてくれます。 毎週月曜日、水曜日 午前10時～12時 1回500～1000円</p>	<p>子ども英語教室 6歳から12歳を対象とした英語教室。 毎週金曜日 午後4時～5時 受講料：1回600円</p>

編集後記

あなたも編集委員会に加わってください。大歓迎です。

今年の夏休みは、火木土をセンターで、月水金を鶴瀬で、子どもの(日本語)学習支援に参加しました。すごく充実した楽しい夏休みでした。9月からは、現実に戻り、就職活動を始める予定です。センターでの子どもクラブの様子は、次号で詳しく報告しますね。(上原)

楊逸氏の「時が滲む朝」が芥川賞を受賞。中国人の作家による日本語の小説である。選評によると、作品の完成度とい

う点において、受賞に値するかどうか賛否両論があったとか。いずれにせよ、近い将来、文学に限らず、あらゆる分野で、在日外国人の活躍が報じられるようになるのでは。(福田)

暑い日が続きますが、いかがお過ごしでしょうか。最近よく食べたくなるのがカレーです。ご飯はもちろん合いますが、今はナンで食べるのにハマっています。そして、飲み物はやはりラッシー。ヨーグ

ルト風味でさっぱり味が、カレー料理には、よく合います。今日も食べようかな。(篠島)

本誌は、隔月で偶数月発行。ところが、この号は9月号。あれ？ 本当は8月に発行する予定だったのだが、編集担当(私です)がどうしても7月に作業ができなくて、1ヵ月遅れてしまったというわけ。でも10月号からは偶数月発行にちゃんと戻ります。(内藤)

編集スタッフ

発行者：石井ナナエ(センター理事長)
 編集委員(50音順)：阿澄康子、荒田光男、岩田仁、石原怜実、上原美樹、王祺、王賛博、川田明香、黄耀潤、斉藤恵子、篠島幹昌、内藤忍、長谷川正江、福田雅伸、山崎友理

特定非営利活動法人ふじみの国際交流センター

〒356-0004 埼玉県ふじみ野市上福岡5-4-25
 Tel: 049-256-4290 Fax: 049-256-4291
 生活相談専用電話: 049-269-6450